

## 教員養成における学生に必要とされる 歌唱学習・指導に関する意識と能力

爲我井 壽 一

### Teacher-Training Students' Perceptions of the Teaching of Singing

TAMEGAI, Hisakazu

#### Abstract

Music education is believed to contribute to the development of students' creativity. Music is also a versatile subject that can easily be combined with other subjects. To obtain optimum benefits of music education, it is essential to improve teachers' practical teaching skills and methods. The author investigated teacher-training students' perceptions of singing learning/teaching methods, and considered which abilities are required to teach singing. As a result, for teacher-training students to be able to conduct practical singing lessons as teachers, it is necessary to improve their abilities and awareness in the following three areas: (1) ability to observe and make judgments in music lessons, (2) mental support for learners in practical musical skills training, and (3) versatile teaching ability to be able to conduct music lessons in combination with other subjects.

**Key Word** : teacher training, music education, teaching of singing, perception

#### I はじめに

筆者は平成 27 年度に開催された第 40 回日本教育大学協会全国音楽部門大学部会に出席した。テーマ「音楽科教育に未来はあるのか?」として、学校教育における音楽科の教育的な存在理由や今後の方向性について話し合われた。だがこのテーマの背景には「学校教育における音楽科の存在意義」が 30 年以上の学習指導要領改訂等の際に議論されてきているが、いまだに音楽の授業の必要性について科学的・学問的な根拠を示せていないという困難な現状が伝えられていた。

堀味正夫ら(1974)は、学校教育における教員の音楽指導に関する問題点は、教員養成における学生への音楽教育が不十分であるとして次のように述べている。「現在、教員養成機関で行われている(音楽専攻生を除く)一般学生への音楽教育は、十分なものではない。音楽的素養を身につけさせることなく現場に送り出してしまふことが多く、ともすると、現場からの批判の声がもれるといった、実に憂うべき現状である」。この報告から学校教育における音楽科の問題点がかなり以前から存在しているものであり、特に音楽を専門としない学生への音楽教育に問題があることが分かる。

さらに前述の堀味ら(1974)は、学校教育において小学校教員の児童に音楽教育の中で最も重要な要求事項

は、「子どもの中に潜在する音楽性を引き出す指導と創造性を育てる」ことであり、そのために教員自身が「高度な指導技術と、十分な音楽的素養を身につけておく必要がある」と述べている。

つまり、学校教育における教師の音楽指導に関する問題点の一つでもある「苦手意識」は、教員養成における学生への音楽教育の在り方とも関連しているのである。

このようなことから、筆者は専門とする音楽教育分野において、本学部の学生が「音楽の知識や技術」をどのように積み重ねていけば「音楽の指導」に繋がるのかを検討することとした。そして学生の歌唱学習や指導に関する「意識」を調査し、教員として歌唱指導を行うための能力について考察した。その結果、次の(1)～(3)に対する意識と能力の向上が学生に必要であると判断した。

- (1) 音楽指導における「観察力・判断力」
- (2) 音楽実技指導における「学習者のメンタルサポート」
- (3) 音楽授業を他教科の学習に関連付けて展開できる「汎用性のある指導力」

II 音楽授業における他教科と関連付けた指導の必要性  
高須一(2015)は、「学校教育における音楽科教育の

重要性は、それが子どもの全人格的な教育に寄与するものである。だが、それを具体的な事例を挙げて広く国民に同意を得られるように示す必要があり、学校で音楽を教える意義を観念的ではなく、実証的に示す必要がある」と述べている。そして、特に音楽教育関係者は「本質的な芸術教科の意義」を理解してもらう努力を行うことが重要であるとして、次期学習指導要領の改訂に向けて音楽科研究者が提案すべきことを、次の3点として挙げている。

- 1) 音楽科教育が子どもの全人格的な形成に固有に果たす資質・能力を研究成果から明らかにすること
- 2) 音楽科教育によって培われた資質・能力が他教科等の学習に生かされるものであり、汎用性・転移性のあるものであることを示すこと
- 3) 音楽科の担う固有性と汎用性・転移性との関係を資質・能力ベースで国民に広く理解されるかたちで示すこと

(下線筆者、出典：高須，2015：p.61)

筆者は、上記の2番目「音楽科教育によって培われた資質・能力が他教科等の学習に生かされるものであり、汎用性・転移性のあるものであることを示すこと」について着目した。この提言は、小学校教員が歌唱指導において児童・生徒の「音楽的な創造性」を養成するために必要とされるものであり、教員養成における学生が音楽学習を深めるためにも重要な要素であると考えられる。

声楽教育分野における楽曲の練習や学習は、技能の向上と作品分析を行いながら歌唱表現法に繋いでゆく。「歌詞と音楽の結びつき」を分解し、その関係性を検討して声楽として身体的な演奏技術によって表現を行うのである。つまり、このような声楽作品の背景と自己の演奏技術を一体化させる声楽学習のプロセスを学ぶことは、音楽授業において、教員が音楽科から他教科への「汎用性」や「転用性」のある授業を展開できる発想や思考法を獲得できる可能性があると考えられるのである。

### III 歌唱学習・指導に関する問題点

#### 1. 歌唱学習に関する問題点

声楽学習における基本は声の出し方、発声法の習得が歌唱学習の土台となる。だが、大学における1年次学生の声楽学習における発声練習の後の歌唱曲の取り組み方に問題があることが見受けられる。

つまり、歌詞の意味と音楽の構成や流れとの結びつきを理解して、作曲家の作品に込められた想いや意図を歌唱表現として如何に演奏するかという、声楽学習のプロセスを理解しないまま、単にメロディーの音程・リズム

に歌詞の言葉を付けて歌うだけで歌の学習としている者が少なくないのが現状である。

声楽学習は発声法が基本であるため、常に自己の声のコンディションに気を付け、日々の練習に取り組みなければならない。そして楽曲の歌詞や音楽の分析と解釈を行い、情景描写や主人公の心理を読み取りながら作曲家の音楽的意図を理解することが大切である。このような歌唱の積み重ねと音楽や歌詞の分析を行い自分なりの演奏解釈を行って歌唱表現に結び付けるのである。

#### 2. 歌唱指導に関する問題点

「音楽をする」ことの中で「歌を歌う」という行為は、一人一人の声や持って生まれた資質が異なることから、「人前で歌う」ときに「他者を意識」しすぎると緊張感が生じる。また、変声期の児童は歌声が不安定な状態となるため、「声＝自分」という「意識」が強い。そのため「他者からの評価」を気にして歌うことに対して「楽しめない」という結果が生じやすい。

あるいは、「声の出し方」そのものが指導されていない児童は、歌唱の際に喉を傷めることがあり「歌うとノドが痛い」となる。そのため「歌うと喉が痛い⇒歌嫌い⇒音楽嫌い」となって、精神的にネガティブな状態で授業を受けなければならなくなる。

小学校における音楽教育の目的の一つは、児童の「情操」や「感性」の育成に寄与することである。そして人間的な成長の発達のためには児童が音楽作品の持つ芸術的な「感動」を「体験する」必要がある。そのため学校教育における音楽科授業での「鑑賞」が重要となってくる。そして、子どもが自分で「音楽を表現」できるようになるためには、発達段階に応じた「知識」「技術」に関する学習の応用である「技能」が必要となってくるのである。

よって、前述の堀味ら(1974)が述べているように、音楽教育の本質は「子どもの中に潜在する音楽性を引き出す指導と創造性を育てる」ことであり、そのために教員自身が「高度な指導技術と、十分な音楽的素養」を身に付けておく必要があると考えられる。

### IV 学生の歌唱学習・指導に関する意識調査の分析と考察

#### 1. 歌唱指導に関する学生の意識調査

教員養成における音楽学生が「子どもの音楽性を引き出す指導」や「創造性を育てる指導」等の指導法を身に付けるためには、どのような音楽学習を行い、指導法を学べばよいのであろうか。また、学校現場で実践的な歌唱指導が行えるような「汎用性・転用性」のある授業を展開するには、どのような発想や意識、そして能力が必

## 【質問事項】

- (1) 歌唱指導上の注意点について  
 (2) (小学校の教員になったら) どのような歌唱指導の工夫をしたいか

表1 歌唱指導に関する学生の意識調査(下線筆者)

事例	自由記述
A	<p><b>(1) 歌唱指導上の注意点について</b></p> <p>発達段階に応じた指導を行う。特に、<u>変声期の男の子の指導</u>は注意が必要である。必要に応じて、歌いやすい音域に移調したり、パート分けをしたりする。歌唱活動に入る前に、正しい発声練習を行う。体を動かした発声練習が効果的であると考え。体で音の高低を表したり、体を伸ばしたりすることで、体が解放されて、リラックスした状態で発声することができる。子どもたちも楽しく、飽きずに歌うことができる。</p> <p><b>(2) 小学校の教員になったら、どのような歌唱指導を行いたい</b></p> <p>楽しく歌える工夫をする。中学年以降は、ハーモニーを作り上げるという経験をさせてあげたい。斉唱から重唱、合唱とハーモニーが重なる喜びは、楽しい経験として子どもたちの中に残ると考える。<u>そのような経験をさせてあげるためには、録音して聴かせたり、ステージに立って歌ったりという経験を積極的に取り入れることが大切である。</u>選曲の工夫：子どもたちにとって親しみやすい曲(明るい曲、聴いたことのある曲など)を選ぶことは、もちろん、一見親しみにくいと感じられる曲でも、教師の工夫次第で積極的に取り組める曲になると思う。リズム伴奏を入れる活動など変化を加えることで、飽きずに楽しく歌唱活動に取り組める</p>
B	<p><b>(1) 歌唱指導上の注意点について</b></p> <p>教師自身が歌うことに対して“苦手意識”をもたないことが大切である。教師の苦手という気持ちは態度としてあらわさなくても子どもたちには伝わるものである。歌の上手い下手に関わらず、<u>自分自身が「歌とは何のためのものか」ということを明確にして授業を行っていくことが大切なのではないだろうか。</u>一人一人への適切な指導こそが、子どもの音楽に対する苦手意識を少なくしていく一歩になると思う。</p> <p><b>(2) 小学校の教員になったら、どのような歌唱指導を行いたい</b></p> <p>最初に、導入場面から無理をして声をださせないということをあげる。今年度行った実習校では、先ほどまで国語の授業をしていたのに、音楽の授業になったとたん冒頭から「もっと声を出して歌いなさい」ときつく指導をしている場面があった。人間の声というのはそんなにすぐには出ないものである。体をリラックスさせてから徐々に声を出していくということを心掛けたい。また、できる限り、ピアノ伴奏をしたいと思う。最近、練習する時間がないなどの理由から伴奏をCDなどで代用する教師も多い。しかし、子どもがのびのびと歌うにはピアノ伴奏は必要不可欠ではないだろうか。<u>今の学習指導要領では「言語活動」が特に重視されている。子どもたちが歌詞の内容そしてその奥にある意味をくみ取ることはこれからの音楽教育において特に重視される点なのではないだろうか。</u></p>
C	<p><b>(1) 歌唱指導上の注意点について</b></p> <p>歌唱の授業で大きな問題となるのは、声変わりをはじめとする演奏に際しての身体的なトラブルだと考える。学級のみならず同じ曲に取り組もうとしても、「自分だけ高い音が出ない…」「きれいな声で歌えない…」「なんだか喉が痛い…」といったトラブルは頻繁に起こりうる。それらが原因となって、「音楽が嫌い」といった感情を育ててしまうことになるのではないだろうか。間違った声の出し方では子どもたちの努力も成果が実らないままに終わってしまい、最終的には音楽嫌いに繋がってしまう。教師は子どもたちの発声法について注意深く観察し、指導・改善を行う必要がある。</p> <p><b>(2) 小学校の教員になったら、どのような歌唱指導を行いたい</b></p> <p>授業の導入にストレッチを必ず取り入れたい。子どもたちは体を動かすことが好きな場合が多く、これを利用して体の正しい使い方を実践的に身に付けていくことが目的である。またストレッチをペアで行うと互いの関係ができ、歌唱の際のアンサンブルの喜びや達成感につながりやすいのではないかと考えられる。何よりも音楽の授業が楽しい、歌を歌うことが楽しいと感じられるよう、<u>基礎をしっかりと、また楽しく身に着ける</u>ことができるための方法であると考え。</p>

D	<p><b>(1) 歌唱指導上の注意点について</b>  「声変わり」をする男子児童について、<u>教師は児童の成長や発達についてそれぞれ理解し、それに応じた指導をしていくことが大切だ。また、周りの児童も「声変わり」という成長していく上で変化が起こることを理解してもらう必要がある。</u></p> <p><b>(2) 小学校の教員になったら、どのような歌唱指導を行いたいのか</b>  私が歌唱指導で工夫したいのは、個人の指導である。学校では1つの学級に多くの児童がいるため、全体に指導することが多くなり、児童それぞれの声の状態や技術について把握しきれない。しかし、<u>少ない時間でも個人指導をしていくことで、児童から教師への信頼感も高まり、教師も児童の状態を把握することができる。</u>私が小学生の頃、音楽の時間に担任の教師がクラス全員に個人指導をしていた。そのことからか、クラスの「歌が好き」という意識が高まり、技術も向上した。</p>
E	<p><b>(1) 歌唱指導上の注意点について</b>  やはり高学年の特に男子では声変わりについて注意しないとイケない。どのようにしたら歌いやすいのか、みんなに合わせて高い声で歌えばいいのか、結局上手く歌えないことが原因で歌唱が嫌いになってしまうという事態だけは避けて声をかける必要があるだろう。<u>ただ大きな声で乱暴に歌ってしまうことは合唱の妨げになってしまい本人の喉を痛めることにもつながる。声楽的な歌い方をするように指導することが大切だろう。</u></p> <p><b>(2) 小学校の教員になったら、どのような歌唱指導を行いたいのか</b>  声変わりについての工夫としては、どの音域まで出るか、どの音域が歌いやすいかなどを調べる程度はできるだろう。声変わり以外の理由であまり歌いたくなさそうな子どもがいたら、まずは理由を聞き、そこから解決策を見つけるのがいいだろう。<u>声楽的な歌い方をさせるのは非常に難しいが、歌詞の意味を考え楽しみながらかつ美しい声を強制するのではなく、あくまで目標にすることでよりよい歌唱指導になるのではないだろうか。</u></p>

用なのであろうか。

筆者は、授業改善を目的として声楽授業を履修する本学部の音楽学生に歌唱学習や指導法に関するアンケート調査を行い、回答を分析し考察した。学生はすでに教育実習や出前授業、演奏発表等において、実践的な音楽演奏や指導を体験している。アンケートの質問事項は以下の2点である。(1) 歌唱学習や指導上の注意点、(2) 自分が小学校の教員となった場合にどのような歌唱指導をしたいか、について実施した(表1)。

## 2. 分析

**事例A:** 児童の身体的な発達段階に応じた指導を心掛けたという意見が見られる。これは、特に男子児童の「声変わり」に関しての対応についてである。男子ほどではないが、女子にも「声変わり」はあるが、歌唱にそれほど影響はないと考えられる。だが、男子の場合は、注意深く観察して一人一人に適切な指導を心掛けないと、声が出ない悩みから「歌うこと」に関してネガティブに感じるようになり、結果として「歌嫌い」となって音楽学習から精神的に遠ざかる要因となるので注意が必要である。

**事例B:** 教師自身が歌唱指導に「苦手意識」を持たないことが重要である。なぜならば、教師の内面的な意識は

児童に伝わるからである。教師が歌唱指導に関して「苦手意識」を持っている場合の工夫として、歌唱にだけウエイトを置かないで鑑賞授業やグループでの歌詞や音楽に対する話し合い学習、そしてクラス内の音楽が得意な児童にピアノ伴奏や楽器を演奏させながら授業を多面的な方法で行うことが必須であろう。

**事例C:** 授業の導入として「ストレッチ」を取り入れることは、発声のために有効であり子どもの授業参加度を高める要素となる。特に小学校の低・中学年の児童にとって「音楽を楽しむ」「音楽に興味を持つ」ことは、高学年からのより高度な知識や技術に関する学習に対する「意欲」の向上に繋がるであろう。

**事例D:** 男子児童の「声変わり」を理解できない子どもが周りにいる可能性がある。「声変わり」に関して知識を持たない者は、「声変わりの児童＝変な声を出す者」という認識を持つ場合がある。特に合唱で歌う場合には変声期の児童は、「声」はもちろん「音程」のコントロールもままならない。教師が男子児童の「声変わり」について「男の子は誰でもなるんだよ」とか、「大人の声になるための準備期間だよ」等の精神的なケアが必須であろう。このようなアドヴァイスが無い場合は、児童は一人で悩むこととなる。そして周囲の児童の理解力が無い場合には「変な声を出す者」「異質な声の持ち主」、ある

いは「いい声で歌えない者」「正しい音程で歌えない者」として「いじめの対象」となる危険性もある。よって、指導者は「声変わり」の児童がいた場合にはクラス内の児童に丁寧に説明する必要がある。

**事例 E**：児童の中には声をあまり出さず歌わない子どももいる。その場合教師は、「なぜ歌わないのか」「どうして声をださないのか」と考えるのではなく、まず児童と話しながら児童の「歌いたくない」「歌えない」と感じる気持ちを理解することが大切である。教員が児童・生徒の視点に立って、「一緒に音楽(歌)に親しんでいけるような指導」が必要であろう。このような場合には、「声を出すこと」の指導から入るのではなく、詩人や歌の歌詞の意味、作品の背景等に興味を持たせ、徐々に「歌うこと」を指導していくことが重要である。

### 3. 考察

学生のアンケートから読み取れるのは、歌唱指導に関する「問題点」として児童の「声変わり」に関する指導方法や児童一人一人の身体的・精神的な発達段階に応じた指導を心掛けることの重要性を理解していることである。またその「問題点」に対応するための「音楽の基礎」を習得していることが分かった。

今回の結果から、本学部の音楽学生は歌唱学習・指導に関して基本的な音楽教育に関する知識や技術、そして教育実習を体験した結果、経験が少ない分野である歌唱指導に対する「知識の応用」や「技術の想像性」に関して理解していることが分かった。

だが、学校現場には「音楽科教育の存在意義」や「音楽教育の本質」を示さなければならないという問題点がある。学生は、今後教員として、森下や高須ら(2015)が提言しているように、「音楽科が他教科の学習にも汎用性・転用性がある教科である」ことを証明できるような音楽や歌唱に関する指導法を学校現場で子ども達と一緒に学習しながら身に付けていく必要がある。そのため、学生が教員として児童に「創造性のある歌唱指導」を行うためには以下の(1)～(3)の意識や能力の向上が必要であると判断した。

- (1) 音楽指導における「観察力・判断力」
- (2) 音楽実技指導における「学習者のメンタルサポート」
- (3) 音楽授業を他教科の学習に関連付けて展開できる「汎用性のある指導力」

### V まとめ

学校教育における問題点として、「音楽科の存在意義」が学習指導要領の改定の際に30年以上にわたって問われている現状がある。そのため、高須(2015)が述べているように、音楽科教育は「音楽授業の必要性」と「音楽の本質」を広く国民に示すことが求められている。

このようなことから、筆者は本学部の音楽学生の歌唱指導に関する意識と指導能力について調査した。その結果、学生はこれまでの声楽学習や教育実習等での体験から歌唱指導に関する知識に関しては、ある程度は理解していることが分かった。だが、より実践的な指導法に関しては技術や意識の向上が必要であると判断した。

今後の課題は、教員養成として学生が「汎用性・転用性」のある音楽授業を展開し、児童・生徒の「創造性」を育成できるような体験授業の実施である。

### 参考文献

- 堀味正夫・柏瀬愛子・佐地多美・野村美保子・藤田まゆみ(1974) 教員養成課程をもつ大学における音楽教育の一考察, 名古屋女子大学紀要 20, pp-151-163
- 福井一(2008) 音楽と脳・こころ, 特別講演(日本教育大学公開養護教諭部門全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会第43回研究協議会並びに総会開催要項) 全国国立大学附属学校養護教員研究会編
- 羽石英里・岸本宏子・本多清志・竹本浩典・齋藤毅・細川久美子・八尋久仁代(2012) 歌うことを科学する ―学際的研究が声楽教育にもたらす可能性―, 昭和音楽大学研究紀要, pp.4-13
- 爲我井壽一(2017) 小学校教員志望学生に必要とされる「音楽的能力」について―一般学生と音楽学生の音楽学習に関する比較から―, 秋田大学教育文化学部教師力高度化プロジェクト研究収録第3号 pp.25-42
- 森下修次・菊地雅樹・高須一(2015) 音楽科は存在できるのか ―/学校教員, 行政, 研究者の立場から, 音楽教育実践ジャーナル Vol.13 no.1 pp.54-65
- 高須一(2015) これからの学校教育が子どもに培うべき学力とは何か ―21世紀型スキルを視点にした創造性の育成, 音楽教育実践ジャーナル Vol.13 no.1, pp.6-17
- 小川容子・高須一・森下修次(2015) 音楽科教育に未来はあるか?, 日本教育大学協会全国音楽部門大学部会会報, 第40号, pp.22-25